

ユニバーサル・ミュージアムはつくられたか??

— 開館3周年記念シンポジウムのその後 —

ひろたに ひろこ
広谷 浩子(学芸員)

今、私の手に、1冊の論文集があります。「ユニバーサル・ミュージアムをめざして—視覚障害者と博物館」と題された小冊子は、当館の開館3周年を記念して1998年に行われた先進的なシンポジウムの記録です(当館ウェブサイトダウンロード可能)。日本のユニバーサル・ミュージアム(以下、UM)誕生の瞬間でもありました。そもそも、UMとは何でしょう? 30年もの間、私の博物館活動を支え励ましてくださった多くの方を思いながら、五七五タイトルと共にこんな問いかけをしたいと思います。

「UDが 社会に広がり 法制化」

近年、ユニバーサル・デザイン(以下、UD)ということばを、公共の建物や交通機関、様々な商品などで見かけるようになりました。昨年の東京オリンピック・パラリンピックの前後から、その出現度が上がっています。

UDは、アメリカノースカロライナ州立大学の故ロナルド・メイス教授によって1980年代に提唱されました。自身が肢体不自由で車イスを使っていた教授は、「できるだけ多くの方が利用可能であるように、製品・建物・空間をデザインすること」をUDと定義し、今後の社会全体の基本となるべき考え方として提案したのです。

障害者に対応した施設のあり方は、それまでバリアフリー(バリアを取り除く)の観点から検討されてきました。しかし、「すべての人が人生のある時点では何らかの障害を持つ」「年齢、性別、国籍、人種等にかかわらず、多様な人々が気持ちよく使えるように、あらかじめ都市や生活環境を計画する」というUDの考え方に移行しつつあります。ユニバーサルな社会では、バリアを持つ人(障害者)と持たない人(健常者)という対置も、バリアを取り除いてあげるという慈善の考え方もありません。誰もが平等にアクセスできて、楽しめるデザインが、最初から実現されていれば、社会はより豊かになります。メイス教授の提案とは、このような発想の転換を迫るものでした。2000年を過ぎたころより、日本にもUDの発想が導入され、我々を

取り巻く環境が新しい視点から見直されるようになりました。2006年には、バリアフリー新法が制定されて、建物や交通がUDにもとづいて見直されました。歩道や電車の駅などのサインブロック、エレベーター、点字標識、トイレ内の音声案内など、さまざまな設備が急ピッチでつくられました。

「UMは 研究テーマか サービスか?」

文頭で紹介した当館のシンポジウムは、社会全体の動きに先立つ形で、多くの博物館関係者、大学教員などを集めて開催されました。当館はすべての事業が始まったばかりで、ユニバーサルな発想も浸透していませんでしたが、濱田館長のリードのもと、「多くの人々にやさしい、開かれた博物館をめざす」というバリューは高く掲げられたのです。

欧米においてUMとは、大規模な博物館という意味で使われることが多いです。しかし、日本においては、R・メイス教授の提唱したUDの意図を汲んで、「誰もが楽しめる博物館」という意味で捉えられています。当館のUM化をリードしたのは、奥野花代子学芸員(現・当館名誉館員)です。館内施設利用の音声案内(トーキングサイン・ガイドシステム)、誘導案内ボランティア、音声による展示解説などの事業を次々に実現しました(濱田・奥野、2000など)。奥野氏は、他館にも目を向けて、アンケート・訪問調査や施設改良への助言なども積極的に進めました。日本博物館協会でも、「誰にもやさしい博物館づくり事業」によって、国内外のユニバーサル化の調査が行われ、2005年から2007年までにその報告書が刊行されました。

しかし、2006年の法制化と共に、全国の博物館がすべて、ユニバーサル化へ向かうことはありませんでした。UDの発想と個々人が行なう研究や博物館事業にかいり乖離があったためではないでしょうか。博物館学の位置づけも当時はまだ不明確であったといえます。

「Muse-men よくよく見れば UM-men」

バリアフリー新法が施行されても博物館のUM化は停滞していましたが、2人の

博物館人が精力的な活動を始めました。

広瀬浩二郎氏は国立民族学博物館(以下、民博)の准教授で宗教史・文化人類学の専門家です。13歳で完全に失明し、筑波大学附属盲学校から京都大学に進みました。2001年民博に着任し、以来、さまざまな事業を企画し、見えない人の世界を広く紹介しています。広瀬氏が提唱する触察の思想は、博物館のユニバーサル化推進の鍵といえます。

三谷雅純氏は兵庫県立大学客員教授で、県立人と自然の博物館(通称:人博)の研究員でもありました。2002年4月に脳塞栓症に陥り、以来右半身麻痺と失語があります。野外でサル類の音声を研究してきた三谷氏は、発病により低下した発語と運動の能力をリハビリによって回復させる傍ら、自分を含めた高次脳機能障害をもつ人々の知覚の研究を行います。失語症・聴覚失認症は、口・のどや耳の機能は正常なのに、脳機能の障害のために、話せない・聞き取れない症状です。彼らが理解できる展示パネルの形や館内放送の有効性などについて、三谷氏は明らかにしつつあります。

広瀬氏と三谷氏は、日常生活においてUDの重要性を強く感じる当事者です。利用者の立場にたった彼らの取り組みを契機にして、博物館のUDが目玉されたことは意義深いものです。これらの成果をもとに、施設設備や展示がつけられた後には、利用者を迎える博物館の側の視点を確立していくことが必要です。

「UMは 誰もが楽しむ 展示から」

バリアフリー新法制定後、博物館においても、ようやく環境整備が進みましたが、中心課題であるユニバーサル展示の実現は、容易ではありません。しかし、昨年、日本では初めてとなるユニバーサルな展覧会「ユニバーサル・ミュージアム—さわる!“触”の大博覧会—」(企画:広瀬浩二郎氏)が開催されました。UDを主役とした展示、しかもコロナ禍で最も敬遠されている「接触」を中心においた大胆な企画です。広瀬氏は様々なメディアを通じ、展覧会の重要性を語り、東京オリ



表1. 事物の属性と把握するための手指の使い方, 大内 進 (2015)から.

属性や感覚特性	属性を記述する用語	手指の使い方
振動	速い ⇄ 遅い	静的な接触
表面の肌理	粗い ⇄ 滑らか	表面をこする動き
乾き具合/湿り具合	湿っている ⇄ 乾いている	静的な接触
表面温度	熱い ⇄ 冷たい	静的な接触
形状	複雑 ⇄ 単純	包み込む動き
傾き	急勾配 ⇄ 平坦	輪郭をたどる動き
曲がり具合	曲がっている ⇄ まっすぐ	輪郭をたどる動き
硬さ/柔らかさ	固い ⇄ 柔らかい	圧す動き
重さ	重い ⇄ 軽い	支えないで持つ動き
弾性	伸縮性のある ⇄ 堅固な	包み込む動きなど
柔軟さ	しなやか ⇄ 硬直した	包み込む動き、表面をこする動きなど



図1. A: 触察は歩きながら, B: あふれるアート.

に、周囲の世界を正確に捉える方法として、学び磨いていく感覚であり、視力の代わりに自然に発達する能力ではありません。表1が示すように、触察によって情報を得るための手指の動かし方は実に多様です。触察がいかに高精度で行われているかは、点字の細かさや微妙な凸面を実際に触ってみればわかるでしょう。

平井 ほか (2014) は、展示を鑑賞する利用者の立場から、触察と観察の違いを考察しました。触察による展示鑑賞では展示物と鑑賞者の体との間に相互作用があり、時には、触察によって対象物が変化するため、より大きな心的イメージができるとして、この過程を知覚鑑賞と呼びました。これに対し、視覚による鑑賞では、パネルの解説文を読み、ケースの中の展示物をながめる形だけのものです。筆者が民博のユニバーサル展示で見た楽しそうな光景とは、まさに知覚鑑賞の現場でした。

と印象深かったのは、自分のみる夢について語った広瀬氏のことばです。「失明後数年で、夢の形が変わった。今は、ふだん感じている世界と同じ形の夢をみる。視覚を使った夢ではない」いったいどんな夢なのでしょう。そこには私たちの理解を超えた触常者の独自の文化があるのです。我々見常者は、たまたま地球上で多数派になった人類にすぎません。我々と異なる方法で情報を得る触常者を「欠けた人」としてではなく、独自の文化をもった人と考え接するべきなのです。

異文化コミュニケーションを博物館でどう扱うかについては、さらに思考を深め検討していかなければならないのですが、一つの異文化を我々はすでに扱っています。その意味で、UMへの道は目の前にあるのです。それは、子ども。ユニバーサル展示を思いっきり楽しむ子どもの力に感嘆し発した広瀬氏の五七五をこの文の結語とします。

「異文化と わかればすすむ? UM化」

民博の展示を楽しく知覚鑑賞しながら、いつしか自分たちの展示作製について考えていました。そして、「これは別物、我々が企画し作ってきたものとは違う」という結論に至りました。博物館でユニバーサル展示を作るためのヒントを得たいと、お手軽に考えていた自分が恥ずかしくなりました。これまでアイマスクやダークバッグを使ってきましたが、ただ視界をさえぎっただけで触察の形だけを模倣したにすぎなかったのです。知覚鑑賞といえるものではなかったのです。広瀬氏は、自分たち触察のエキスパートを触常者と呼び、観察によって情報を得ている見常者(健常者ではない!)と対置させて、両者の関係を異文化コミュニケーションと扱うべきと主張しました。まさに異文化だな

「たいあたり たいわをひろく こどもたち」

参考文献

大内 進 (2015) 視覚障害教育における触察立体教材の意義と活用. 大内 進 (編), 国立特別視点教育総合研究所共同研究 研究「3D造形装置による視覚障害教育教育用立体教材の評価に関する実際研究」研究成果報告書, pp4-18.

平井康之 ほか (2014) 「知覚を刺激するミュージアムー見て、触って、感じる博物館のつくりかた」学芸出版社, 京都, 158pp.

濱田隆士・奥野花代子 (2000) 「ユニバーサル・ミュージアムをめざしてー神奈川県立生命の星・地球博物館の取り組みとトーキングサイン・ガイドシステムの開発・導入についてー」神奈川県立博物館研究報告, 29:127-136.

パラ2020や2025年開催予定の大阪万博との関わりをアピールしました。「今だからこそ、触が重要だ、ユニバーサル化を行事の時だけで終わらせないと」。

展覧会終了直前に、筆者は民博を訪れました。展示室はたくさんの来館者を集めてにぎわっており、触ったり、寝転んだり、音を聴いたりして、活発に動き楽しむ人々の姿がとても印象的でした (図1A)。

「触察は 展示を感じる すごい武器」

視覚に頼らない展示観覧方法の中心は触察です。視覚優位の生活をしている多くの人々には耳慣れないことばですが、視覚障がい者が最初に学ぶ最も大切な行動です。触察力は彼らが生活のため